The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Osaka Literary Review 誕生
Author(s)	枡田, 良一
Citation	Osaka Literary Review. 1981, 20, p. 11-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25601
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Osaka Literary Review 誕生

枡　田　良　一

このような言い方をすれば，不謹慎と受け取られるかも知れないが，実は，私には，*O. L. R.* 誌創刊の経緯は，その誌名の相談を除いて，殆ど記憶にない。二十年の歳月は，忘れ難き事柄までも記憶の彼方へと追いやってしまうものなのであろうか。だが，一概にそうとも思えない節もある。そこのところは甚だ心許ないのだが，記憶すべきことなど元々何もなかったのかも知れないというような気もする。私の印象では，恐らく，それほど大上段に振りかぶった気負いからではなく，ごく自然に研究機関誌発刊の気運が生じた感がある。それは，今から思えば，むしろ好ましい誕生であったと言えようか。多少とも我田引水ながら，それは自己表現の，或いは，英語・英文学研究の発表の場をもちたいという，私達の純粋に学究的な欲求の自然な現われであったと言えば，その余りにも調子のよい優等生的建前論に苦笑を呈されることになろうか？　論文の点数かせぎのためという功利的な理由が，その本音としていささかも介在していなかったと言い切る自信は今の私には到底ないが，当時の，大学に職を得ることの至難さ（私達はそう感じ取っていた）を思えば，就職のために論文点数を揃えるということなぞ，少なくともその時の私には殆ど念頭になかったこともまた否定し難い事実である。それほど素朴に研究誌発刊に対していたのは私だけであったのかどうかは知らない。或いは，このような感慨は，研究誌の創刊に対する私の他力本願的な接し方によるのかも知れない。

誌名 *Osaka Literary Review* 決定のいきさつだけは，その細部はともあれ，不思議と私の記憶に残っている。創刊号の編集後記によれば，「英文科大学院在学生から成る談話会を中心に有志が集まり」，発刊の運びとなったとある。同人として十四名が名前を連ねているところをみると，確かに

最初は有志だけの会であったのだろう。その十四名全員が，それとも，その中の何人かが集まって誌名を決定したのかどうかは定かではないが，ともかく各人がそれぞれ希望の名称を持ち寄って相談することとなり，この時も，私自身は全く無責任に他人まかせで何の名称も準備せずに会合に臨んだ。幾つかの名称が持ち出されて討議され，結局は無記名にて票決することと相成り，私は終始〈*Osaka Literary Review*〉を推し，それに一票を投じて，現誌名の実現に，微少ながらも，結果的に一役を果たしたことは，他力本願的な私の，せめてもの参加の証であったかも知れない。

提出された幾つかの名称の中ではっきりと私の記憶に残っているのは，決定名以外には〈Pegasus〉のみである。なぜこれだけに限って私の記憶に留まり，他はすっかり消え去ってしまったのかはよく分らない。〈Pegasus〉という名称も候補としてはかなり有力であったのだろうか？　こちらの方を推す者も何人かはいたように覚えているが，あれかこれかで口角あわをとばして論議した記憶は全くない。とすると，私が未だにこの名称を忘れずにいるのは，単に私の個人的な印象のせいかも知れない。〈Pegasus〉にこめられた意味合いは分らぬでもないが，私にはこの名称はいかにもわざとらしくて，面映ゆいものであった。少女趣味的という感じさえしないでもなかった。(名称提供者に対し，乞う寛恕！)

他方，〈*Osaka Literary Review*〉の方は，見ての通り，特別な意味・内容をもつものではなく，単に地域的な固有名詞を冠した英文学研究誌というにすぎない。同じ大学院に学ぶという，ただそれだけの共通の場をもつ同人会であり，特定の主義・主張の下での集まりではないだけに，この種の無色で，主観に偏さない名称の方がむしろ好ましく私には思えた。見方によっては，無味乾燥な誌名のようにも受け取れるが，下手な衒いのないのが何よりの取り柄であろう。この誌名なら，後で気恥しくなるような惧れもまずはあるまい。果して，二十号を重ねた今，〈*Osaka Literary Review*〉なる名称は，何のけれん味もなく自然に定着したように思えるのだが，それはこの誌名に対する私の個人的な慣れというにすぎないのだろう

か。願わくば，そうでないことを切に望む。

話は前後するが，投票によって誌名の決定した直後，藤井治彦君（多分，私と隣り合わせに坐ってでもいたのであろうか）が私の耳許に口を寄せて，「実は，あれは僕の提出したものだ」とささやくように告げたのを覚えている。まさか彼が冗談で言ったとも思えないし，いかにも彼の考えつきそうな誌名でもあるから，恐らくは彼が元々の命名者なのであろう。その後，そのことについて特に確認したわけでもないが，今日に到るまで私は固くそう信じている。

私にとって本誌は，ただただ研究成果の発表の場としてよりも，むしろその合評会の方にこそ意味があった，とまでは言い切れぬにしても，合評会での同人相互の辛辣なやりとり，時には，為にする揚げ足取りなど，それらは必ずしも善意に満ちたものとは言えないけれど，結構楽しく，それ相応に有意義であったことを認めねばなるまい。叩く方も，叩かれる方もその善し悪しは別にして，大いに個性的な(？)応じ方で弁じたり抗じたりしたものであるが，その割には互いに敵意を抱くこともなく打ち過ぎたのは，当時の私達は，結局は，根は無邪気な学徒の域を出るものではなかったからかも知れない。それとも，素朴な学究心が個人的な感情を超越させたのであろうか。そうであれば，なおのこと幸いであったと言えよう。ただ，このような私の思いが，私自身の鈍感さに由来すると，同人諸氏の失笑を買うことがなければよいのだが……。